「さあ、天を見上げて」

創世記 15 章 5 節。
「そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」」

「さあ、天を見上げなさい」、「さあ、天を見上げて」という主なる神様からの言葉です。
この言葉は、信仰の父、アブラハムにかけられた言葉です。
アブラハムは元々アブラムという名前でありました。アブラハムは 75 歳という高齢になってから、神様からの呼びかけを聞きました。

創世記 12 章 1 節です。
「主はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」

そしてアブラハムは主なる神様に告げられた通り、それまで住んでいたハランという地を離れて、カナンの地に向かったのです。

「わたしが示す地へ行きなさい」という神様の導きと共に、「そうすれば、わたしはあなたを祝福し、地のすべての部族は、あなたによって祝福される」という約束が与えられました。

高齢になっていたアブラハムは、それからいかに神様と共に歩み、どのような祝福を受けたのでしょうか。そして私たちはその祝福をどのようにして受け継ぐことができるのでしょうか。

恐れるな

アブラハムは、主なる神様の言葉を聞いて、カナンの地に導かれていきました。それは大変な旅であったと思います。
これまで住んでいた土地を離れるということだけでも大変なことだと思います。それだけでなく、親族を置いて旅立たなければならならかったのです。妻と甥のロトだけを連れて、見ず知らずの土地へと導かれたのです。

すでにその地にはカナン人がいました。アブラハムはそこで何ができるのでしょうか。とにかくアブラハムは祭壇を築いて神様を礼拝しました。

アブラハムは礼拝をしつつ、神様の祝福を待ち続けました。カナンの地について、すぐに祝福を受けるというわけではなかったのです。
アブラハムの信仰の旅は、ハランからカナンへの旅で終わらずに、人生をかけた信仰の旅を歩むことになるのです。

主なる神様に導かれて、礼拝しつつ、なお、アブラハムは様々な苦労を経験します。
祝福があるはずの地で、飢饉を経験します。
神様に導かれた人生を送っているにもかかわらず、貧しさを経験します。神様が「あなたを祝福する」と言っているにもかかわらず、アブラハムは飢饉を経験します。
これが信仰の父アブラハムの人生です。

「神様、なぜですか」、「神様、本当に私を祝福してくださるのですか」、「神様、何が間違っているんでしょうか」とアブラハムは葛藤したことだと思います。

それだけでなく、甥のロトとの別れを経験したり、そのロトのために、周りの国々との争いに巻き込まれてしまったりしてしまいます。
「あなたによって祝福される」と言われたにもかかわらず、争いを経験し、恐れを抱くようになります。

「ハランに帰りたい」、そう思うことがあったでしょうか。しかし、アブラハムは、神様の約束を信じて、神様の祝福を求めて、カナンの地で礼拝を続けながら、そこにとどまります。

創世記 15 章 1 節。
「これらの出来事の後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」」

「これらの出来事の後」、75 歳のアブラハムが神様の声を聞いてハランの地を旅立ってから、色々な出来事がありました。そしてそれはどれも神様の祝福とは思えないような出来事でした。
飢饉に襲われることがあり、共に歩んできた甥のロトとの別れ、国々との戦いに巻き込まれたこと。祝福を期待しているにもかかわらず、貧しさ、別れ、争いを経験します。

本当に神様の約束は実現するのだろうかという疑い、これからの人生どうなっていくんだろうかという恐れ、そして私の身の回りで一体何が起こっているんだろうかという不安が募っていきます。

「これらの出来事の後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。」
一人静かに床について、これまでの出来事を振り返りながら、主の祝福を期待しつつも、疑問、不安、恐れ、無力感、孤独、色々な思いがグルグルと浮かんでくるそんな夜だったのでしょうか。

主のことばが幻のうちにアブラムに臨みます。
「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」
恐れの中にあったアブラハムに対して、主なる神様は「恐れるな」と言われました。

神様に導かれてここまで来たはずのアブラハムです。カナンの地で祭壇を築いて、神様を礼拝し続けてきたアブラハムです。
こんな風になるなんて、神様は共にいるのだろうか。様々な思いが溢れる中で、ここまで導かれてきたにもかかわらず、その神様が自分のことを忘れてしまっているんではないだろうか。あの約束を忘れてしまっているんではないだろうか、ということがアブラハムにとっての一番の恐れ、不安であったのではないでしょうか。

しかし、神様は確かにアブラハムと共におられました。アブラハムが、疑問、不安、恐れ、無力感、孤独、色々な思いを抱えていることを知っておられたのです。

そんなアブラハムに神様は呼びかけられました。「恐れるな」、「大丈夫だ」、「安心しなさい」
このときの、「恐れるな」という言葉は、聖書に出てくる最初の「恐れるな」という言葉です。それから聖書には「恐れるな」という言葉が繰り返し出てきます。
信仰の父アブラハムの人生には恐れが伴いました。後のアブラハムの子孫の歩みにも恐れが伴いました。
それは、それほど神様の祝福の計画が大きくて、私たちの身の回りの現実とはかけはなれているということなのでしょう。

後のアブラハムの子孫である、イサクも「恐れるな」と言われました。ヤコブも「恐れるな」と言われました。

イスラエルの民に対しても預言者を通して「恐れるな」と言われ、そして新約聖書においてもイエス様は、「恐れないで」、「心配しないで」と言われるのです。
同じようにして主なる神様は私たちに対して、「恐れるな」と言われるのです。

アブラハムにとって、一番の問題は子どもがいなかったということです。75 歳を超えて、「あなたの子孫を通して祝福が広がる」と言われれて、子どもがいないということはアブラハムを不安にさせました。これは一体どういうことなのだろうか、神様の祝福の約束に対する疑いが生まれてきます。

いつでも信仰者を悩ませ、不安にさせ、恐れさせるのは現実的な問題です。
アブラハムが飢饉を経験し、家族との別れを経験し、争い事を経験し、そして何よりも祝福の後継者がいないという状況に置かれていたのと同じように、信仰者には現実的な問題が伴います。私たちの身の回りにも、現実的な個人的な問題として、病があり、貧しさがあり、悩みがあり、人間関係の問題、現実的な問題が溢れています。

アブラハムもカナンの地に導かれて 10 年間、様々な現実的な問題に悩まされ続けてきたことでしょう。
神様の祝福の計画が本当に実現するんだろうか。

ですから、「恐れるな」と言われても、簡単に、「やっぱりそうですか」、「祝福を待っています」と答えることができないアブラハムがいました。

しかしそれは、「恐れるな、わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」と言ってくださる神様を信頼しているからこそ、祝福を期待しているからこそ、約束を確信したいからこその、信仰ゆえの神様とのやりとりであったのかもしれません。

世俗的な考えと、信仰的な考えの間で葛藤している、私たちと同じような人間らしい、信仰の父アブラハムの姿がありました。
アブラハムは主なる神様に向かって正直に「あなたの計画が理解できない」と、この先、私はどうしたら良いのでしょうかと問いかけるのです。
「本当に報いがあるんだろうか、祝福があるんだろうか、子孫が与えられるんだろうか。あなたは、私の現実を知っているんでしょうか。」

それもまたアブラハムの信仰でした。

真剣に神様の計画に向き合うアブラハム、あきらめるでもなく、投げやりになりになるのでもなく、神様に全てをまかせるのでもなく、私は何をしたら良いですかと、心から祝福を求め続けるアブラハムの姿です。

「子どもがいないけれども、それでは養子を迎えるということなのか。奴隷の息子を跡取りにするということなのだろうか。」
アブラハムは、自分なりに考えた計画を、神様に打ち明けます。

しかし主なる神様は言いました。「ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」
神様のご計画はアブラハムの人間的な計画を越えるものでした。そして、神様はご自身の力でそのことを確かになさろうとしておられるのです。

さあ、天を見上げて

創世記 15 章 5 節。
「そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」」

「さあ、天を見上げなさい。」
この天の星々を造ったのは誰だか知っているのか。あなたは、天の星々を造ることができるのか。
この私が天の星々を造ったのだ。あなたができないことでもあっても、わたしはできるのだ。

「さあ、天を見上げなさい。」
この天の星々が輝いているように、あなたの将来も輝いている。このわたしが天の星々を輝かせているのと同じように、私があなたの将来を輝かせる。

主なる神様は、私たちが神様の大きな計画を理解できず、想像することができず、現実的な問題に心奪われて、悩まされて、不安にあり、心配になり、恐れるときに、私たちが抱えているその全てを受け入れて、理解してくださり、「さあ、天を見上げて」と言われるお方です。

「さあ、天を見上げて」。あなたの将来は希望にあふれている。
「さあ、天を見上げて」。私があなたの将来を輝かせるから。

人間的な弱さを抱える私たちが、悩むとき、落ち込むとき、将来の希望を見失う時、神様の計画に疑いを持ってしまう時、希望を与えてくださるのが私たちの主である神様です。

下を向いて、うつむいて、元気を失くしている私たちに、「さあ、天を見上げて」という声が聞こえます。
将来の希望が見えない、お先真っ暗だという私たちに、「さあ、天を見上げて」という声が聞こえます。
自信を失くして、落ち込んでいる、失望している私たちに、「さあ、天を見上げて」という声が聞こえます。
悩みの中にあって、押しつぶされそうになっている私たちに、「さあ、天を見上げて」という声が聞こえます。
本当に神様はいるんだろうかと、神様を見失い、迷いの中にある私たちに、「さあ、天を見上げて」という声が聞こえます。

人間的に考えるならば、「そんなことはありえない」ということになるかもしれません。
しかし、天を造られた神様が、この世に光を与えられた神様がなさろうとしてるご計画であるならば、それは必ず実現します。私たちは必ず神様の祝福を受けることができます。

私たちは今、「さあ、天を見上げて」という主の言葉を聞くことができるでしょうか。
そして私たちは、天を見上げて何を見ることができるでしょうか。
神様は、本気で祝福を与えようとされています。自分では何もできない、小さな無力な私を通して、神様がなさろうとしていることがあります。

アブラハムは、「さあ、天を見上げて」と言われて、天を見上げました。
「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

「あなたは信仰を持ってここまで来たではないか。」、「さあ、天を見上げて」、「さあ、信仰を持って」、「さあ、私を信じて」、「さあ、祝福に期待して」、「これからも、さあ、一緒にいこう」と、神様からのメッセージを、アブラハムはしっかりと受け取りました。

アブラハムは主を信じた

創世記 15 章 6 節。
「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」

「アブラムは主を信じた。」実際にアブラハムは自分の子を見ていないけれども信じました。人間的に考えるならば、高齢の夫婦に子どもが与えられると言うことはあり得ないことでありましたが、アブラハムは信じました。

アブラハムは主を信じました。天地を造られた神様を信じたのです。人間的に考えるならば不可能なことであっても、神様ならできると信じたのです。
ただ主を信じること、ただ主に期待すること、主の約束の実現を待ち続けること、これが信仰の父アブラハムの信仰です。

85 歳になったアブラハムの信仰の旅はまだ続いていきます。もちろん人間的な弱さもありますが、それでも神様が励まし続けてくださるのです。
そして、アブラハムの力ではどうしようもないことであっても、主が働いてくださり、主がことを行ってくださり、主なる神様ご自身が約束を実現してくださるのです。

アブラハムはその人生の旅路の中で、人間中心の歩みからから神様中心の歩みへと導かれてきました。様々な人間的な現実的な問題を経験したけれども、その経験があったからこそ、人間的な考えを捨てることを教えられ、神様に信頼することをその人生の中で教えられたということなのかもしれません。

主に導かれて、信仰を持ちつつ、年を重ねるアブラハムは、あらゆるものを捨てていきました。この世的な考え方を捨て、自分中心的な計画を捨て、自分の力に頼ることを捨てることを教えられました。その代わりに主に信頼することを教えられました。

アブラハムは、礼拝を続け、主なる神様の言葉を聞き続け、神様と共に歩む人生をおくりました。
アブラハムが特別に何か大きなことをしたということではありません。むしろ自分の無力さを教えられ、アブラハムはとにかく、ただひたすらに、主なる神様に信頼し続けたのです。

「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」
何かの行動をもって、立派な行いをしたから、奉仕をして熱心に活躍したから、神様が喜んで、彼を正しい者としたわけではありません。

アブラハムはただ神様を信じ、神様に信頼し、自分の考えや計画を捨てて、主なる神様の導きにゆだねたとき、神様はアブラハムを正しいとされたのです。

私たちは、自分で何かを成し遂げて、その結果を見たい、何かを手に入れたいと思います。しかし、神様のご計画は天を見上げるほどの大きな計画であり、アブラハムの時代から今まで続いている大きな計画です。そして、この神様の偉大な計画は私たちの次の世代、そのまた次の世代にまで続いていくものなのです。

幸せな晩年、年老いて満ち足り

創世記 25 章 8 節。
「アブラハムは幸せな晩年を過ごし、年老いて満ち足り、息絶えて死んだ。そして自分の民に加えられた。」

ハランの地から導き出され、カナンの地でのアブラハムの歩みは、幸せな晩年を過ごし、年老いて満ち足りたと言われます。

「ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」その言葉を信じたアブラハムにはイサクが与えられ、孫まで見ることができました。

幸せな晩年、年老いて満ち足りたということは、単に長寿を全うしたということではなく、アブラハムが神様とともに歩んだということです。
信仰的に人生を全うしたアブラハム。神様によって満たされた人生、たとえ現実的な問題を抱えたとしても、主にあって平安だと思うことのできる人生、そんな人生を私たちも信仰をもって引き継ぎたいと思うのです。

私たちは歳を重ねれば、重ねるほど、できないことが多くなり、体の衰えを感じ、無力感を覚えるかもしれません。
しかし、私たちは、何かをするということによってではなく、主なる神様に信頼すること、そして、主なる神様のご計画の実現を期待するということによって、幸せな晩年を過ごし、年老いて満ち足りるということになるのでしょう。

私たちに与えられる祝福は、自分で何かをしてその結果を見るということではなくて、私たちの人生に働かれる神様の御業を見ることであり、そして私たちが見ることのできる祝福は神様が与えてくださる大きな祝福の一部であるということです。

アブラハムが見た祝福があり、私たちが見ることのできる祝福があります、そしてこれから見ることのできる祝福もあるでしょう。

アブラハムは死んで、自分の民に加えられました。地上での生涯を終えて、新しいいのちを与えられ、神の民に加えられるという祝福があります。

アブラハムは天上で生き続け、アブラハムの信仰は地上の次の世代へと引き継がれていくのです。
アブラハムの子どもたちは、確かに神様の祝福を受けて増え広がっていきました。それは、アブラハムが神様に従った信仰の実です。その実は今もこれからも豊かに結ばれ続けていくのです。

「さあ、天を見上げて」
私たちは地上的なことについ心を奪われてしまいます。この世的な価値観、自分の考えによって生きようとしてしまいます。
そんな私たちに、「さあ、天を見上げて」と、神様の大きな計画に心を向けるようにと導かれます。
そして、信仰の先輩方の歩みを見習うようにして、天の御国を目指す歩みをするようにと導かれます。

信仰の父アブラハムの祝福が今に至るまで拡がっています。
そして、アブラハムの信仰を受け継いでいる、私たちの信仰の先輩方の信仰を引き継ぎたいと思います。
今まさに、アブラハムのように信仰を持って歩んでいる信仰の先輩方の姿を見習いつつ、そしてまたこの私も、ただ主に信頼して、神様の大きな計画と祝福を見るものでありたいと思います。
そして、その信仰を次の世代へと引き継ぐ者でありたいと思うのです。

アブラハムの子孫が、アブラハムの信仰ゆえに祝福されたのと同じように、今、私たちが受けている豊かな恵みとたくさんの祝福は、これまでの多くの先輩方の信仰の歩みがあったからこそであります。信仰の先輩方に感謝しつつ、信仰という財産をしっかりと引き継ぎたいと思います。

「さあ、天を見上げて」
アブラハムと共に、信仰の先輩方と共に、私たちは天を見上げて歩み続けたいと思います。

土浦めぐみ教会は神の祝福を受け継ぐ信仰の家族です。これからも信仰を持って、主に信頼し続け、主に期待し、主なる神様の大きな計画の実現のために生きる群れでありたいと思います。